
ミラーワールド 真実を探す対立心

レー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミラーワールド 真実を探す対立心

【Nコード】

N9302X

【作者名】

レー

【あらすじ】

説明を見ないと分からないであろう部分があります。

魔法が存在する世界で研究所の助手をしていた少年はイーグルズという組織の争いに巻き込まれてしまう。さて、どうなる事か。

1話

ハール

『はじめまして、私はクラウ・ハールという者です。かつて、イークルズによる黒族戦争によって差別の時代は終わり、そして激動の時代が始まった。戦争は英雄バグドル・ヤイバが終わらせつかの間の平和。しかし、今は激動の時代という事を忘れてはいけませんよ。ここはミラーワールドの世界の一つ、世界リプダクだ。リイユウが造りだしたこの世界には変わった黒族がいる。様子を見て見ようか。』

プラネン

『何だよリイユウ？呼びだしなんて』

リイユウの呼びだす時なんて厄介事があるに違いない、しかも本人はこちらが困るのを楽しんでいる。あいつほど捻くれた奴なんて見たことがない。

リイユウ

『悪口を考える暇があれば助手として仕事しようか？』

笑顔怖い。

リイユウ

『さて、世界ダルミトへ行ってジダイガから呪文の本持ってきてもらおうか』

プラネン

『何でだよ？リイユウは呪文なんて必要無いだろ？あの無理矢理な』

方法があるんだから』

リイユウ

『大丈夫、サポートを連れて来たからな』

話聞いた？そしてサポート？やな予感。

リケ

『やー、プラネンク々だねー』

プラネン

『何でこいつ？仲間どころか敵増やすの？』

リケ

『ええ？敵ー。あーなるほどー、以前人体解剖の実験体にしたの怒ってるー？』

プラネン

『当たり前だ、お前常識あんの？死ぬほど痛かったぞ、死なないけど』

リケ

『大丈夫だよー、黒族死なない。ほらー常識あるー。次は風穴開けたげるねー』

もう、何処にとは聞くまい。大体予想がつく。

リイユウ

『それでは、仲直りしたところでダルミトへ行ってもらおうか』

リイユウはダルミトへ続く鏡を持ってくるが、帰りは？そして老いぼれて仲直りに見えたのかよ。

リイユウ

『帰りに必要なリプダクへの鏡は向こうで探さない。そして、プラネン？乱暴な口調ですね？』

ああ、やばいかも。

リケ

『じゃー行こうねー』

待ってよ、向こうで鏡探すなんて無理じゃね？引っ張るなよ、え？本当に行くの？帰りは？オーイ

ハール

『鏡の中に消えて行ってしまった二人、無事に帰って来られるのか？』

リアルワールド 外伝

幸明

『あっはっは』

何だ？急に幸明が笑い出した。大丈夫か？

悠一

『幸明どうした？』

幸明

『だってさ、三人の天才の内二人が一つの部屋にいるんだよ？なにやりだすかわかんないじゃん』

悠一

『私の技術は弱者のためだ、悪意などいらぬ。人と人に差など存在しない！』

幸明

『わかったよ、電気技術の天才幸明はあんたを手伝うよ』

悠一

『はあ、まあいい。もう少しで転送装置ダークミストアートの完成だ』

そしてこの日を境に一人は行方不明となった。

ミラーワールド 2話

ハール

『ダルミトへ着いた二人に待ち受けるものは一体なんだろうね?』

黒い霧のせいで世界ダルミトは見通しが悪い。ジダイガめこの世界の管理者なら仕事しろよ。

リケ

『暗いよー、闇の力であふれる世界なんて邪魔だー』

プラネン

『うるさい。文句ならジダイガに言え』

ん?何かやってきたな

ペール

『カカカ、キャクジンカ。ハタシハ、ドグ・ペール』

目の前に木の人形がいる。あれは、ジダイガの部下のペールか。あいつは操作術で糸を操る事が出来る。そういえば、本人に会ったことないな?いつも人形を操作しているのか?

ペール

『オマエハ、プラネンカ。ヒサビサダナ』

プラネン

『ジダイガに会いたいんだけど?』

ペール

『ハナシハキイテイル、カカカ、オイカエスヨウニナ』

なんでだよ。まあいいや、こいつを退治すればいいのさ!

ペール

『イクゾ? 操作(首吊り自殺の貫き人形)』

両手に剣を持った人形が一体現れる。危なっかしいな。しかし、人形は動きが鈍い。

プラネン

『無駄だ!(対極剣)で切り刻んでやる』

対極剣を光属性に変化して人形を切ると同時に操作を解除。効率的だな。

ペール

『カカカ、ヤルナ操作(集団自殺の増殖人形)』

やばい、たくさんの人形が押し寄せてくる! やっぱり命令を出してあの人形をやっつけとけばよかった。

プラネン

『とりあえず守りを固める! 光術』

リングバリア

光属性のバリアは物理攻撃に強いが、人形は疲れを知らず剣で切りつけている。まずい、バリアが持たないな。

リケ

『誰か無視してないー？ウインドブレード風魔法』

風の刃が人形を切りにこつちに向かってくる。ん？こつち？

グサリ

プラネン

『ギャー、首が取れたー！』

血の水溜まりが出来た。やっぱり敵だったのか？

ペール

『ココハヒクカ』

人形はその場で倒れて動かなくなった。のはいいが、どうするよ矢
血状態だよ？

リケ

『さっさと再生しろー、どうせ無事だろー』

プラネン

『ひでえ』

とりあえず、ホラーだから落ちた頭を拾って首の上に乗っけるとく
つつき始めた。

プラネン

『おまえな、謝るとかないのか？』

リケ

『え？プラネン怪我してないよー、謝る理由わかんないー』

確かに怪我は既に治ってる、だが痛い、何故それがわからないんだ！

リケ

『はいはい、黒幕さんのお出ましたよー』

黒い服の目つきがとてつもなく悪いジダイガさんあらわる。

プラネン

『やっぱりお前が黒幕か！』

ジダイガ

『黒幕？なんの話だ？』

プラネン

『なんで呪文書を渡そうとしない！ペールに護らせて明らかにこうなるとわかってたたる！』

ジダイガ

『灯台もと暗し、真実は貴様らと？』

何言ってるんだこいつは、いみわからん。

ジダイガ

『信用出来るのか？リイユウを？』

プラネン

『確かにあいつはやばい奴だけど』

裏でとんでもない実験をしているのは知っている。ガルド・クロリアは心配するなど言っただけだ。

ジダイガ

『分からないか？見えないだろう。善や悪など』

リケ

『結局何が言いたいのさ』

ジダイガ

『この時代力が必要さ』

リケ

『それならさー、骨抜きにして鍋にぶち込んで煮立てやろうか？』

ジダイガ

『なかなかの虚栄心だ。いや、恐怖心か？』

リケ

『知らないねー、あんたの内臓を目の前で切り裂いてやろうか？』

ジダイガ

『怖いだろ？自らを蝕む呪いが、羽族の守りが無ければ既にこの世にいないのだからな』

リケ

『証拠なんてないよ』

ジダイガ

『何故羽族の守りを風属性に変換させているのだ？守りが壊れると困るのだから？そして呪いの気配がする』

リケ

『・・・』

リケにかかっている呪いはよくわからないが解いてはいけないらしいな。でもなんで呪いとあの言動の関連があるんだ？まあいいや。

プラネン

『めんどくさい！お前を倒せばいいんだろ！』

ジダイガ

『クク、足掻いてみる。現実と幻想の区別出来ぬ者よ』

ハール

『強敵ジダイガを倒すことは出来るのか？楽しみだね？』

ミラーワールド 3話

ハール

『さてと、ジダイガには見つかりたくないから、そろそろ離れるか。』

ジダイガ

『どうした？かかって来ないのか？』

明らかにリケの様子がおかしい。傍若無人の魔法使い二人目がここまで静かなのは不自然だ。一応一人目は勿論リユウだけだな。

プラネン

『お前を倒せばいいんだろ、単純じゃないか』

仕方ない（対極剣）を構えておくか。

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）幻影（偽りの暗殺）さあどする？』

ん？一瞬ジダイガの姿がぶれた？きのせいかな。ジダイガは四本の剣を取り出したな、あれはジダイガの剣（四羽刺翼）だ。長い鎖のついた細身の剣でよく剣自体を投げて使ってる。まあ鎖を引っ張れば手元に戻って来るから便利なのか？まあいいや、相手が剣ならやることは一つ。

プラネン

『こっちも剣で戦うのみだ！』

先手必勝だ、向こうに向かって剣を振り回す。(対極剣)は大きめだから、四本あっても細身の(四羽刺翼)では防ぎきれないはずだ。と思っただけ、ジダイガは後ろに飛びのいて空振り。おしい。

ジダイガ

『次はこちらだな。幻影(百の剣四の死体)』

ジダイガの剣がみるみる増えて、たくさんになった。これでどうするの？ああ、投げてきたよ。全部一気に、なにやってんの、あぶないだろ。

グサツ グサツ グサツ

プラネン

『ギャー！』

数が多過ぎて避けきれない。意識が朦朧としてくる。でも、剣が増える？ありえなくね？

プラネン

『もしかして、^{ライト}光魔法』

辺りを光で照らすとたくさんの剣は消えジダイガの手元に四本だけ残った。ついでに自分自身を見ると怪我もしていない、あれ？痛かったよな？

プラネン

『あれでダメなら魔法はどうだ！^{ブラックハード}闇魔法』

黒い光線がジダイガへ一直線！このスピードなら避けられないだろ！

ジダイガ

『闇を使うなど愚かだ。操作（漆黒の墮神との契約）』

あれ？ブラックハードが向きを変えてこっち来た！

プラネン

『来るんじゃない！調和術（孤独の恐怖による破壊への対立心）』

ブラックハードは破壊を拒絶する力により逸れて関係ない所にぶつかった。

プラネン

『危なかった』

ジダイガ

『プラネン、私の闇を操る力の事忘れてたな？油断大敵だ、幻影（死の鳥飛ぶ鳥）』

ジダイガは自分の左腕を切り落とした。馬鹿なの？左腕は剣を握つたまま落ちて消え、ジダイガの左腕は再生した。何がしたかったの？

プラネン

『意味わかんねー、ウェイブ剣技』

衝撃波がジダイガへ一直線、ここであいつはあれを使うはずだ。

ジダイガ

『その程度か、ブラックハード闇魔法』

衝撃波は闇の光線に掻き消されるが、予想どおり！

ブラネン

『引つ掛かったな！ライトヴァーン光魔法』

闇の光線と光の光線がぶつかり合う。ここまで予想どおり！

ブラネン

『終わりだジダイガ！リングバリア光術調和術（いがみ合う属性対立心）』

闇と光は反発し辺りを破壊しまくる。こっちはバリア張ってるから平気なのさ、ジダイガお前の負けだ。

ドカーン。

反発力って凄いな、土煙で見えないだろうが。

ジダイガ

ディークル
『闇属技』

何？ジダイガは爆発に巻き込まれて重症なはず、そもそも光の力も受けたはずだからすぐに再生も出来ないはずだ。

ヒュウ

剣を持った左腕がこっちに突っ込んできた。光術では相性悪くて防ぎきれないし、調和術では近すぎて意味がない。

プラネン

『ああそうだ、これがあつたな。(サーヴェルドブック)』

サーヴェルドブックでジダイガの左腕を叩き落とし、(対立剣)で切り裂く。さすが神の本だ絶対に破けないのは本当だな。

プラネン

『切り落とした腕が今更襲ってくるとか反則だろ』

切り落とした腕の操作なんてどうやれば出来るんだろ。リユウに聞こうかな。

リケ

『ビミョーじゃない？ジダイガ？』

ジダイガ

『そうだな、リケ。私はプラネンがテルトスを倒す事は出来ないと推定する』

え？何この二人。後ろを振り向くと何事もなかったかのようにリケとジダイガが話をしている。

プラネン

『結局何なんだ！』

リケ

『馬鹿だなー、リユウのテストだよ。プラネンはジダイガの幻影と戦ってたのー』

ジダイガ

『幻影（二重人格の犯罪者）は私の幻影を造るため、幻影（偽りの暗殺）は幻影の痛みを与えるためだ。注意不足に知識欠落。貴様はその程度か』

ブラネン

『ひでえ評価』

リケ

『ブラネンが馬鹿なせいでこっちも酷いこと言われたんだからねー』

ブラネン

『呪いのことは関係無いだろ』

リケ

『八つ当たりは決定だー』

ブラネン

『なにそれ、八つ当たりの自覚あり？』

ジダイガの方向を見るとあいつはニヤリと笑いやがった。確信犯だ。なんで周りには傍若無人な捻くれ者が多いのか。

ジダイガ

『イークルズが動き始めているのは知っているな？問題とされているのはテルトスだがあいつはあらゆる攻撃が効かない』

ブラネン

『なにそれ無敵？』

リケ

『破壊の力を触れただけで消してるんだよねー。しかも、こっちはテルトスに触られただけで、さよーならー』

ジダイガ

『テルトスは触れた物を消す事が出来る、そのためか奴は常に浮いている。つまり無自覚な力だと予測される』

リケ

『テルトスもー魔力変換体質だしねー』

プラネン

『結局どうやって倒すんだよ？』

はつきり言ってそんな怪物と敵対したくない。なんで倒す話になつてんだろ？

ジダイガ

『テルトスはイークルズの一人であるため、どんな行動に出るか分からない。いざという時にはプラネンの対立心を強める能力で無理矢理テルトスを切る方法があるのだが』

リケ

『残念ープラネンは雑魚だったー』

プラネン

『何だよそれ、知らない内に巻き込んで』

ジダイガ

『まあいい、テルトスは私が何とかする。貴様らは帰れ』

納得がいかない、いつか絶対ジダイガお前を倒す。

リケ

『鏡無いよー』

ジダイガ

『世界イエロザの鏡ならあるが？』

リケ

『それでいいやー』

プラネン

『いや、良くない』

帰れないよ？しかもイエロザは砂漠だよ？何しに行くの？

リケ

『プラネンのお家探しの旅にレッツゴー！』

プラネン

『何だそれ！』

ハール

『そんなこんなでイエロザに行く二人。そういえば、その後プラネンはリケに解体されてしまったらしいよ？』

リアルワールド 外伝2

美和

『ねえ路亜。あの二人どうなったんだろうね?』

路亜

『知りませんよ。行方不明になって数年経っているのですから生きてはいないでしょう』

美和

『いやあ、生きてるよ。向こうの世界で』

路亜

『向こうの世界? 夢物語でしょう?』

美和

『あるよ、向こうの世界、面白いねえ。』

路亜

『美和さんにはついていけないです』

美和

『何言ってるの? 路亜も行くんだよ?』

路亜

『そつでいいですか』

美和

『面白いねえ、ミラーワールド。新しい研究が出来るだろうか。ア
ハハ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302x/>

ミラーワールド 真実を探す対立心

2011年10月26日10時05分発行